

脱炭素先行地域・生駒市における カーボンニュートラル実現と 歩いていけるまちづくり

令和6年11月19日

公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団
第12回環境シンポジウム

こむらさき まさし
生駒市長 小紫 雅史

小紫 雅史 (こむらさきまさし)



昭和49年3月生まれ (50歳)
兵庫県出身 / 妻・3男1女



「こむらさきまさし」



komuchan2001



「生駒市役所」

Web市長室

・奈良県生駒市長【3期目：奈良県市長会長】

- ・新しい霞が関を創る若手の会 (プロジェクトK元副代表)
- ・環境省を変える若手の会代表
- ・立命館大学「霞塾」元客員講師
- ・2019年マニフェスト大賞優秀賞



1997年3月 一橋大学法学部 卒業

2003年6月 シラキュース大学マックスウェルスクール
行政経営大学院修了 (行政経営学修士)

1997年4月 環境庁 (現 環境省) 入省

ハイブリッド自動車に対する税制のグリーン化、ローソンやモスバーガーとの環境自主協定の締結、レジ袋の有料化、プラスチック製容器包装の3Rなど

2007年3月 外交官として米国ワシントンDCの日本国大使館勤務

2011年8月 公募により生駒市副市長に就任

2015年4月 生駒市長に就任 (現在3期目)

- ・テレワークや兼業可能なプロフェッショナル人材の採用、副業支援
- ・「自治体3.0」「ワーク・ライフ・コミュニティ・セルフのブレンド」によるまちづくり
- ・誰でも歩いて行ける場所に小規模多機能コミュニティを整備する「まちの駅」事業
- ・「株式会社いこま市民パワー」の設立によるSDGs 未来都市、地域経済循環の促進 (政府の脱炭素先進地域認定)
- ・ビブリオバトル全国大会など、本と図書館を活用したまちづくり (2021年ビブリオバトル大賞、2020年図書館大賞優秀賞)
- ・まちなかバル、起業支援の「いこま経営塾」、生駒山のブランド化などの産業振興
- ・市民等からの寄付を活用した受動喫煙対策、地域ネコの保護推進
- ・不登校の概念をなくす多様な学びの場、個性を伸ばす教育 (2022年ICT教育アワード経済産業大臣賞) (ほか)

近畿の中心、けいはんなの中心



生駒の観光資源



奈良先端科学技術大学院大学



生駒山上から眺める
大阪平野の夜景



高山茶釜



生駒ケーブル



宝山寺(生駒聖天)

◇人口 117,295人 (少子化・高齢化が顕著)

◇大阪都心部まで電車で約20分

◇県外就業率 全国2位 (域外消費率全国トップレベル)

◇定住希望率 88.9%

◇本当に魅力ある市区町村ランキング 奈良県1位



今日お話ししたいこと

- I 気候変動の影響と市民の関心
- II 脱炭素×まちづくりの実践！
生駒市版まちのえき

さいごに
まちづくりとウェルビーイング

I 気候変動の影響と市民の関心

気温の上昇

1日平均気温の年間平均(奈良県奈良市)

1992年

14.8℃



2022年

16.2℃

1日平均気温の月間平均 (8月：奈良県奈良市)

1993年

24.6℃



2023年

28.9℃

<気象庁公表データより>

- 熱中症による健康被害
- エネルギー、電気代高騰
- 食糧価格などの高騰

R3：約600人 R4：約1,000人

※奈良県消防救急課報道発表より

日常化する異常気象

- 強い勢力のまま台風が上陸するケースや、線状降水帯の発生増加



- 災害対策本部設置や避難指示の回数増加
- 倒木による車の損壊事案などの発生



「脱炭素」はだれも反対しない、しかし・・・

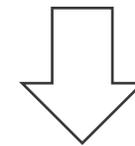
Q. 市で取り組む施策分野の重要性について

順位	施策
1	医療
2	生活安全
3	防災
4	道路・公共交通
5	消防
：	：

24 低炭素・循環型社会

「令和4年度生駒市市民実感度調査結果」より

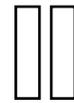
他の行政課題と比べて
市民の関心が低い
(事業者と比しても)



「脱炭素」の取組に
「行動を伴う」理解を
得る難しさ

だからこそ！まちづくり全体で考える！

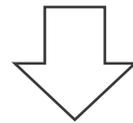
環境問題をまちづくりに組み込む



市民の関心が高い分野、まちの課題・ニーズと組合せ

(少子高齢化 → 介護予防・健康づくり、買物・食事支援、子育て支援)

(域外就業・消費が多い → 地産地消による地元企業活性化、地域経済循環の強化)



「結果的に」「知らないうちに」脱炭素になる社会の仕組みづくり

(環境問題に、環境の顔で取り組んではいけない)

Ⅱ 脱炭素×まちづくりの実践！ 生駒市版「まちのえき」



歩いて行ける「まちの駅」のイメージ



地域コミュニティの場



市民
余った食料、本
食器、生ごみ



公園や自宅の緑化、栽培
などに活用



農業者



堆肥

新鮮野菜
米

環境・3R(コミステ)

- 資源回収・分別
- 生ごみを堆肥化
- もったいない食器市
- フリーマーケット
- 家で余った食料

健康・文化

- 百歳体操・軽スポーツ
- まちかど図書室
- 音楽、文化
- 出前講座
- 移動保健室

- 乗り合い自動車
(災害時非常電源)

コミュニケーション

- 地域食堂・Café
- 地域サロン・お茶会

フードドライブ

買物・食事・生活支援

- 農産物の朝市
- スーパーの
移動販売
- キッチンカー
- ゴミ出し・草刈り支援



子育て・女性活躍

- こども・地域食堂→持ち帰り
- 託児・小規模保育
- コワーキング・テレワーク
- コミュニティでの創業
- 公園を活用した子育ての場
- みんなのプール

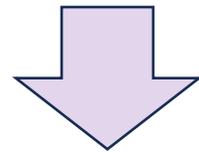
地産地消、移動支援、地域活性化を、地域の協創で実現！

1. 「まちのえき」が必要な社会的な背景

(1) 公共交通・ライドシェアより効果的な移動支援

<高齡化の現状>

- 平均寿命 : 男性81.05歳、女性87.09歳
- 高齡者人口 : 3623万人(総人口比29.1%:過去最高)
- 75歳以上人口 : 初めて2000万人を超え、10人に1人が80歳以上
- 高齡者割合 : 世界で最高(200の国・地域中)
- 高齡者一人暮らし : S55:男性4.3%、女性11.2%→R2:男性15.0%、女性22.1%



「暴走老人」「公共交通崩壊」報道

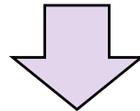
「認知症」から「移動支援、買い物・医療難民」へ
「免許は返納したいが、返納したら生きていけない」

⇒ 人生100年時代を喜ばない一人暮らし世帯の急増

<移動手段の確保の難しさ>

- 民間バスの支援: 他の行政ニーズとの均衡、バス路線以外の市民の理解
- 公共交通バス・デマンド交通:
利用者少ない、赤字、バス路線以外の市民の理解
- ライドシェア: 事例少ない、タクシーと変わらない料金
- その他: 助け合い輸送、グリーンスローモビリティなど

どれも移動支援・買い物難民の切り札にはなっていない



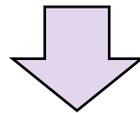
【問いの再構築】

交通手段の多様化と同時に、「歩いて行ける」場所に生活機能、コミュニケーションの場を創る方が効果的ではないか？

(2)核家族化を補う地域での子育ての場

<少子化の現状>

- 出生数 : 770747人(2022年・前年比40863人減:過去最少)
- 合計特殊出生率 : 1.26(前年は1.30:過去最低) ⇒ さらに減少見込み
- 予定・理想の子どもの数: 「1人以下」は6.6%、実際は27.3%
- 予定・理想と現実の乖離の理由
 - ◆「子育てや教育にお金がかかりすぎるから(52.6%)」
 - ◆「これ以上、育児の心理的、肉体的負担に耐えられないから(23.0%)」
- 他方、核家族化、共働き世帯増加など、家族の子育て機能の低下



現代社会において、子育て世帯の負担軽減には、子育て世代同士が
つながる場、世帯だけでなく「地域で育児」できる場・機会が不可欠

(3)活用されていない自治会館、公園

- 自治会加入率： 78.0%(H22)⇒71.7%(R2)
- 高齢者の利用に偏る自治会館
- 利用規制・制限だらけで活用できない公園の増加



- 住民ニーズに応える価値を生み、多様な世代が集まる自治会館
 - 住民主体の多様な活用が実現する公園
- ⇒ 「歩いて行ける」場所にある資産を最大限活かす！

2.「まちのえき」の具体的な取組事例

(1)まちのスポーツジム(運動する)



(1)まちのスポーツジム(運動する)

<背景>

- 急速な高齢化、健康寿命の延伸の必要性
- 障がい者、子どもたちにも楽しいスポーツの普及

<概要>

- 市民主体の体操教室で健康づくり
- ボッチャ、モルック、グラウンドゴルフなど

<効果・意義>

- 頭と体を同時に使うことによる高い健康増進効果
- モルック・ボッチャなどは全世代、障がい者も参加可能
- 集客力の高さを活かせる

(2)まちのショッピングセンター(買う)



(2)まちのショッピングセンター(買う)

<背景>

- 買い物支援が必要な市民の増加
- 多様な販売方法への転換を模索する事業者

<概要>

- 400種類の商品を扱う移動スーパー
 - 地元農家の朝どれ野菜販売
 - 出張駄菓子屋
 - 大手小売事業者の実証事業(赤ちゃん本舗、花王ほか)
- ⇒ 近くで買える(高齢者の移動支援、子育て世帯の負担軽減)
- ⇒ 野菜などが安い、フードロス対策など

(3) まちの食堂・喫茶店(食べる)



(3)まちの食堂・喫茶店(食べる)

<背景>

- 高齢者夫婦や一人暮らし高齢者の世帯の増加
- 要介護や死亡リスクが高くなる「低栄養傾向」の高齢者の増加
- 1日3食が辛い子育て世帯
- 食事の提供で創業を考える人の増加(飲食店・主婦など)

<概要>

- 自治会館での地域食堂、軽食サロン
- キッチンカーの出店

<効果・意義>

- 安い、おいしい、楽しい、みんなに役割

(4)まちの図書館(読む)



(4)まちの図書館(読む)

<背景>

- 子どもをはじめとする「読書離れ」
- 公共図書館の増加(20年間で600館以上、約24%増加)、集客力の高さ
- 通うのが難しい住民の増加
- コロナ禍に、自宅の本や漫画を断捨離したいというニーズ

<概要>

- 自治会館にDIYで本棚を作成
 - 各世帯から本・漫画・絵本・DVDなどの寄付(断捨離)
 - まちの図書室での貸し出し、ビブリア、読み聞かせなど
- ⇒ 通いやすい、男の人の出番、公立図書館との連携
- ⇒ 断捨離、柔軟な運用(漫画、DVD、お茶)、いろいろな本の企画

(5)まちの学校・塾(学ぶ)



(5)まちの学校・塾(学ぶ)

<背景>

- 「協働的な学び」の必要性
- 子ども同士が教え合い、大人と対話する中で、より深い学びを得、自信をつける

<概要>

- 自習室
- 出前授業
- 放課後子ども教室
- 学習塾、宿題合宿(斜めの関係から本格的な塾指導まで)
- みんなのセミナー

⇒ 多様な学びの場、自律的で双方向の学び、地域での学び

(6)まちのアトリエ・スタジオ(演じる・観る)



(6)まちのアトリエ・スタジオ(演じる・観る)

<背景>

- 自治会文化祭が復活・増加
- コロナ禍で文化・芸術に再注目(活発な制作、人に見てもらいたい)

<概要>

- 自治会館で、写真展、絵画展、書展、文芸展...まちのアトリエ
- 一本のギター、エレクトーン、ストリートピアノ...まちのスタジオ
- カラオケも立派な文化活動

⇒ 高い集客力、新しい生きがいの発見、観るから制作する側へ

(7)まちの遊び場(遊ぶ)



(7)まちの遊び場(遊ぶ)

<背景>

- 幼児期に外遊びをよくしていた児童は、体力も高い
- 低年齢層(0歳から満9歳)の子どもの74.4%がインターネットを利用

<概要>

- 公園をWSで再生、活用(1人当たり公園面積は増加、禁止事項の解きほぐし)
 - 鬼ごっこ、缶蹴り、縄跳び、ボール遊び、みんなのプール・ストライダーレース
 - 祭り、焚火・BBQ・焼き芋会、キャンプ
 - 自治会館でゲーム(子ども)、健康麻雀(シニア)、ボードゲーム(多世代)
- ⇒ スマホ禁止・制限でなく、スマホ以外の面白さの提供
- ⇒ 世代を超えて楽しむ、女性の麻雀ブーム
- ⇒ 公園管理を地元で

(8)まちの農場(耕す、栽培する)



(8)まちの農場(耕す、栽培する)

<背景>

- 耕作放棄地面積:平成7年に24.4万ha、平成27年に42.3万ha
- ガーデニング・家庭菜園の市場規模は、コロナ禍もあり、2365億円と堅調

<概要>

- 農家の指導により、農地をみんなで開拓・管理・活用
- 収穫祭、焼き芋、BBQ、芋煮会
- ピザ窯、BBQプレートのWS

<効果・意義>

- 耕作放棄地の解消と農地の有効活用
- 収益確保、まちのえきの持続可能性
- 子育て世代の参加
- 地ビール企画・マルシェとの連携など発展可能性高い

(9)まちのリサイクルステーション(循環する)



(9)まちのリサイクルステーション(循環する)

<背景>

- リサイクルの不徹底(燃えるゴミ中、古紙類8.9%、プラ製容器包装8%、食べ残し17.8%(手つかずが8.5%))
- コロナ禍の断捨離ブーム

<概要>

- リサイクル品をいつでも出せる基地、壊れたおもちゃや家電の修理
- 子ども服やおもちゃ・本などのリユース・交換の場、フードドライブ
- フリーマーケット
- 生ごみ回収、量り売り
- メルカリ講座、メルカリを活用した断捨離促進

⇒ 3Rの推進、モノを通じた交流、販売による収益確保

(10)まちの保健室・病院(診る・癒す)



(10)まちの保健室・病院(診る・癒す)

<背景>

- 高齢者の外出希望先2トップ「買い物」「病院」
(買い物:80.7%、通院:45.2%、趣味・社会活動:44.6%)

<概要>

- 「まちの保健室」:健康体操、体力測定、健康相談・指導、介護者の支援
 - 「まちの病院・診療所」:オンライン診療の都市部への対象拡大、在宅だけでなく公民館なども利用可へ
- ⇒ 健康増進、医療費削減
- ⇒ 身近な場所での受診、安心

(11)まちの保育園(育てる)

<背景>

- 子どもを育てやすい国だと感じる日本人は61.1%(他国より低い)
- 「地域で子育てを助けてもらえるから」「社会全体に理解があるから」と答えた人も減少

<概要>

- 育児相談
- 子育て世帯間の子育てシェア
- 地域での一時預かり、「家庭的保育事業」



⇒ 子育て世帯の負担軽減、子どもの多様な学び、地域の活性化

(12)まちのオフィス(働く)

<背景>

- 企業のテレワークOK:51.2%、×:37.7%
- 自宅83.7%、シェアオフィス約10%

「家族に気兼ね」「職場以外の人との交流や人脈」「買い物と合わせて利用」「自宅にこもらないように」など

<概要>

- 「まちのオフィス」は、自治会館の空き室利用したシェアオフィス
→ 近い、安い、子ども連れOK

⇒ 現役世代と地域との接点、現役世代にも地域活動にもプラス



(13)まちの避難所・交番(守る)



(13)まちの避難所・交番(守る)

<背景>

- 災害が増えているが、指定避難所まで歩いて行けない
- 犯罪件数や交通事故(特に高齢者)の再増加

<概要>

- 電気自動車(EV)を自治会館につないで簡易避難所に
- 平時、EVは青パト・助け合い交通にも活用
- 特殊詐欺や交通安全の啓発(1人暮らしの被害リスク軽減)

⇒ コミュニケーションと地域力で犯罪や事故を減らす

⇒ 平時のつながりが災害時に生きる、近場で安全・安心を確保

3. 「まちのえき」が どうして脱炭素につながるのか

- 一人ひとりが買い物や食事等に車で出かけるのではなく、歩いて行ける場所で生活機能や楽しみの場がある
- 地産地消の野菜を食べることによるCO2削減
- みんなが一緒に冷暖房「Cool & Warm Spot」←人が集まる仕掛け
- 自治会館に太陽光発電
- 青パト & ライドシェア用のEV
- 本や子ども用品、食料のリユース(おすそ分け・シェア)

環境自体を目的にしてもうまくいかない！

地域を楽しみ、地産地消を進めれば、環境は良くなり、SDGsは具体化

⇒ 楽しく人が集まる場所を作れば地域課題は自然に解決する！

おわりに

～まちづくりとウェルビーイング～

ウェルビーイングを実現する、 生駒市の「地域共生社会」のコンセプト

「誰一人取り残さない」=「誰一人お客様にしない」

⇒すべての人が役割を持つ

- 地域活動に汗をかいた人の方が幸福度、満足度が高い
(生駒市市民実感度調査の結果)
- 役割を持つことで、人を頼ることへの抵抗感が減少
(地域に入れない高齢者男性への工夫)
- 自尊心を傷つけることなく、必要な人を支援できる
(こども食堂の功罪)



ご清聴ありがとうございました！